

「人文通識：アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座（10）

テーマ：東アジアの環境・エネルギー問題と解決のための課題

第10回ワンアジア財団国際講座は日本の名城大学教授の李秀澈先生がご担当なされた。李先生は韓国のソウル大学をご卒業後に日本の京都大学で経済学博士を授与され、ご専攻は環境経済学である。李先生は長年、東アジアの環境問題に傾注されており、今回のテーマは(1)東アジアの大気汚染問題、(2)東アジアの廃棄物問題、(3)気候変動問題、(4)東アジアの原子力発電問題、(5)今後の解決のための課題である。李先生は先ず東アジアの大気汚染の問題を提出し、ご見解を述べた。先生は東アジアの範囲を中国、台湾、日本、韓国(含北朝鮮)の地域と定義し、これらの国家にとって環境問題は運命共同体であると指摘し、それぞれが協力して問題を解決するべきだと述べた。近年、化石燃料の使用に伴い、その燃焼で排出される有害な大気汚染物質が偏西風の影響で広範囲に東アジア地域国家に影響を及ぼしており、特にPM2.5の問題が最も重大であると指摘した。PM2.5の粒子は人の毛髪やスギ花粉よりも更に小さく、人が長期間吸い続けると喘息を引き起こし、肺癌等の病気にも罹りうるということで健康に対する甚大な危険性を持つ。中国の一年間のPM2.5平均濃度は既に減少しつつあるが、まだ制定された標準に達するには程遠く、各国が降り続けるPM2.5の濃度を下げるには努力し続ける必要がある。

次に東アジアの廃棄物問題を取り上げ、特に廃棄物の国境移動問題と海洋プラスチック問題に焦点を当てた。どの国家も自国内の様々な廃棄物、例えば電子機器の廃棄物や医療廃棄物を中国やフィリピンなどへ運んで処理し、その地域の環境を汚染したり、処理従事者の健康を害させたりしている。中国政府は昨年、廃棄プラスチックなど11種の廃棄物を輸入することを禁止し、国内廃棄物汚染問題を改善した。その他、海洋プラスチック汚染物は各国が同じように直面している喫緊の問題である。一年間に流入する海洋プラスチック廃棄物の重量は、50000機のジャンボジェット並みの重量である。しかし、プラスチック廃棄物の分解時間は非常に緩慢であり、プラスチックごみは海洋生物の生態系を激しく破壊する。近年、ペットボトルの回収強化によって、プラスチック製容器及び包装等の使用が減少する傾向が徐々に受け入れられ、環境を保護する材質の製品の値段が比較的高くなって、伝統的なプラスチック商品に代わり、人類の環境保護意識も上昇しているようである。

続いて、先生はグローバルな気候変動の問題を分析し、世界のCO₂排出が1850年の産業革命以後に激増の様相を呈したと指摘した。最大の問題はCO₂排出によって地球の気温が上昇し、事実上、過去100年間で0.8度も気温が上昇し、国連政府間気候変動専門委員会IPCC（Inter-governmental Panel of Climate Change）の予測では今世紀中に4.5度も上昇しうるのであって、今後の人類が地球に住み

続ける脅威となっている。この解決のために、2015年国連は気候変動条約を取りまとめ、196の国家がパリ協定で締結し、2100年までに温室効果ガス排出を実質的にゼロにすることを目標とした。2018年の台湾はCO₂排出量が世界第23位で、政府が再生エネルギー供給を目指すことを打ち出したが、日本及び欧米の各国と比べて台湾よりも再生エネルギー比率が低く、先生は台湾政府がより高い比率を目指すことを提言した。

最後に先生は東アジアの原発問題を取り上げ、日本が東日本大震災後に福島第一原発で起きた事故の話をした。事故が発生してからの汚染水と汚染土の処理は未だ解決に至らず、現在も40000人以上の住民が自宅に戻れない。東アジアの原発地図を見ると、東アジアは疑うことなく地球全土で原発が最も密集している地域であり、東アジアの原発問題は今後も非常に重要な課題である。

以上を総合して、先生は各国が協調して行動し、協議体を作って東アジアエネルギー環境安全に関連する法律を創設すべきだと指摘した。環境問題は国境で分けられる問題ではなく、十分に検討して有効な解決策を打ち出すことが必要である。その他、いわゆるリデュース、リユース、リサイクル方式でごみの量を減少させ、CO₂排出量の取引制度を導入し、電動バイクの使用率などを普及させるなど様々な環境問題解決の具体策を挙げた。先生は受講生たちに生活の中でプラスチック製品の使用を減少させ、ペットボトルの回収を確実にを行い、人々がそれぞれ自らの出来る範囲で環境保護を進める心を養うよう期待して、本講座を締め括った。

(ウェブサイト：<https://oneasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(原稿作成：林孟蓉・日文系副教授)

(翻訳：齋藤正志・日文系副教授)